

幕末続き物合巻と切附本(二)

—『古今草紙合』の場合—

一、はじめに

幕末の合巻『古今草紙合』(以下『草紙合』と略称し、本稿での図版は大妻女子大学本を使用する)全十三編は笠亭仙果の作で、版元は江戸・紅英堂蔦屋吉蔵、各編の柱刻、刊行年、本文の画工は次のとおりである。

初編	文太初	嘉永二年	三世歌川豊国
二編	文太二	同 年	歌川貞秀
三編	文正三	同 三年	一雄齋国輝
四編	古今四	同 年	一雄齋国輝
五編	塩屋五編	同 四年	一雄齋国輝
六編	塩屋六編	同 年	一雄齋国輝
七編	草紙合七	同 五年	一雄齋国輝
八編	古今八	同 年	一雄齋国輝
九編	草紙合九	同 六年(序)	一雄齋国輝
十編	草紙合十	同 年(序)	一雄齋国輝
十一編	草紙合十一	安政元年	一雄齋国輝
十二編	草紙合十二	同 年(改印等)	一雄齋国輝
十三編	さうし合十三	同 三年	二世梅蝶楼国貞

本書は四編上までが御伽草子『文正草子』の翻案で、同下からはお

石 川 了

染久松譚に文正関係者を配し、十三編には御伽草子『鉢かづき』をも取り入れた作である。未完のままで終わっているが、十三編上巻末に「有漏助および網太が結末は、十五編に詳記すべし」と予告しているので、少なくとも十五編までは出版予定であったことがわかる。文正譚とお染久松譚の取り合わせは、『枯尾花』にみえる許六の句「塩売にあつらへて来る油筒」から思いついた(五編序)もので、二つの世界を古と今、時代と世話とに配した(三、十編各序)点に特色がある。

本稿では、この『草紙合』が板木流用によって改変され、少なくとも三作四冊(おそらくは三作五冊)の切附本となって出版されていることを指摘し、併せて改変の背景とその意味について述べてみたい。

なお周知のことではあるが、『草紙合』を含む幕末続き物合巻の書誌的形態の原則について確認しておきたい。表紙は刷付け錦絵表紙で、各編とも一編は上下の二冊からなり、上下とも分量は各十丁、丁付は上下通しとなっていて一から二十である。一丁目表(以下一オ、裏の場合は一ウと記す)は序文、一ウと二オ(時に二ウと三オも)は見開きの口絵でおおくは薄墨を使用、十ウと二十ウつまり上下各最終丁裏には大きな文字で作者名と画工名を入れる。また草双紙の慣例として五丁分を一巻とみなし、一オ・六オ・十一オ・十六オの上部匡郭外には一から四までの巻数をそれぞれ刷り込む。

二、『しほや栄花譚』
文正『栄花譚』

問題とする三作の切附本とは、『しほや栄花譚』（以下角書は省略する）、『油屋お染』、『お染恋情』（ただし仮書名）である。

まず『栄花譚』であるが、名古屋市蓬左文庫尾崎コレクション所蔵の中本四十五丁一冊本で、刷付け錦絵表紙に右書名があつて、「嘉永二年酉魁月 笠亭仙果」序（『草紙合』初編序に同じ）、最終丁裏には「仙果作」「国輝画」（『草紙合』四編上十ウに同じ）とある。しかしこの表紙は、実は山東京山作の合巻『大晦日曙草紙』二十編上（嘉永六年刊、紅英堂版）のその流用で、「上」の一字を削り、枠内にまとめて記されている書名と編数を削除して新書名を入れ木したものである。また見返しは、同二十編下の錦絵表紙を墨のみで刷つたもので、「下」の一字と「外題豊国画」とあるのを削つた他は、元のまま「山東庵京山作」「一登斎芳綱画」「紅英堂梓」とある。後述の奥付広告からして、この『栄花譚』の版元も同じく紅英堂である。本書は『草紙合』初編から四編上までの七十丁（つまり『文正草子』を翻案した部分）から四十五丁分を抜き出し、その板木に手を入れて一作にまとめあげたものである。その修訂の物理的方法を、後述する『油屋お染』と『お染恋情』の場合も含めて整理すると、

- A 半丁分全体を新刻する。
- B 絵の一角を削除し、その跡に入れ木で新たな文章を加える。
- C 文章や語句、小道具図を削除する。
- D Cのようにした上で、その跡に入れ木で新たな文章や語句を加える。
- E 上下各最終丁裏の作者名と画工名を削除する。
- F Eのようにした上で、その跡に入れ木で新たな図画を加える。

G 改印や五丁ごとの巻数字表示を削除する。
H 序文箇所または口絵の薄墨刷りを省く。
の八通りとなる。次にその全四十五丁を『草紙合』と対照させてみる（上段が『草紙合』の柱刻・丁付、中段が『栄花譚』の柱刻・丁付、下段が修訂部分通し番号と修訂方法）。

文太初・一オウ	↓	文太初・	一オウ	① H
二オウ	↓	二オウ	二オウ	② H
十二ウ	↓	十二ウ	二ウ	③ B D (図ア)
十三オウ	↓	十三オウ	三オウ	
十五オウ	↓	十五オウ	五オウ	
十六オウ	↓	十六オウ	六オウ	④ G
十六ウ	↓	十六ウ	六ウ	
十七オウ	↓	十七オウ	七オウ	
十九オウ	↓	十九オウ	九オウ	
二十オウ	↓	二十オウ	十オウ	
文太二・四ウ	↓	文太二・一ノ五オウ	十ウ	⑤ D
五オウ	↓	五オウ	六オウ	
六オウ	↓	六オウ	六オウ	⑥ G
六ウ	↓	六ウ	六ウ	
七オウ	↓	七オウ	七オウ	
七オウ	↓	七オウ	七オウ	
九オウ	↓	九オウ	九オウ	
十オウ	↓	十オウ	十オウ	
十一ウ	↓	十一ウ	十ウ	⑦ D
十二オウ	↓	十二オウ	十ウ	⑧ D
十三オウ	↓	十三オウ	十三オウ	
十四オウ	↓	十四オウ	十四オウ	

に、土も焦げるばかり。木の葉も草もしほみ弱り、人も犬もあへぎ苦しむ、汗塩はやく衣の乾く夕べに至りて、いよ／＼暑し。されども池の水深く、この花の咲き出でたるが清らなることものに似ず、池水湧くがごとくなれど、ひろ葉・巻き葉に露持ちて、風もこゝのみ吹き渡り、涼しき道と歌に詠む極楽世界の心地す。文太はしばし木陰に立ち寄り、この様眺めて涼みあけるが、その昔鹿島にて暁方に見し夢の、こゝを見るにも尊さまさり*」「御くすり・おしろい、白芙蓉・あけのふじ 一包三十六文づゝ、売り広め所 版元薦吉」

「続き片意地に、こなたも強ひずうち過ぎたり。文太は妻が不慮に身を果たし、故、その入り目多く、そが上様々の損耗重なり、そのつぐの年夏に及び、我が家にも住みわびて、茨城郡の袴塚長者が跡といふ所に小家を求めて、これまでの家はこがねを借りたりし人の手に渡すに定め、今百両あまりもあらば、いかやうともこゝにして商ひをもせらるべしと思へども、わづか五両も調ひかね、久しく住みし角折を離れんとする心の内、さこそと思ひやられたり。娘 ▲右の下へ」「▲上より」お蓮は鹿島の申し子なれば、他所へ行くにもなほ我が子の行く末祈らまく、かつは大ごじ殿にもいとま乞ひ申し上げんと、お蓮を伴ひまづ神へ詣で、かく*」

⑦【原本左下最後の六行】

「兩人返事はいかにぞと問はるれば、衣手は仰せをいかで背かんと、顔うち赤めていひければ、文太は頭を畳にすり付けへ「ありがた過ぎたる殿のお言葉、自体は結句失礼ながら次へ」

← 「ト義を押し理を説ひてすゝめ給ふにぞ、文太も衣手もありがた涙にむせび、いらへさへ出でず喜びあひけり。かくて文太は衣手が土産の金を元手となし、商ひを手びろになすほどに、今



図ア



(尾崎コレクション本)

年の次へ」

⑧【原本右上最初の四行】

「続き」女ほに持つて世を送り、また文正が家の女、色の黒きは一人もなし。常々こゝの塩を買ひ、彼にあやかり美しいつま子を持つて、福人になるこそよけれと競ひて買へば、いかほど多く焼かせても、売り余るといふこと」(「なければ」と続く)

←

「続き」冬は、昔のさまに勝るとも劣らぬ繁昌、借金も大方済ましぬ。これひとへに大ぐじ殿のみ蔭によればトしばく行きて礼を述べ、夫婦のあはひ睦まじく、神ほとけの助けにて」(「なければ」と続く)

⑨【図イの右上部分】

「(待合の絵)」「続き」閏月をいれる」

←

「続き」仕ふれば、娘が心を察し、かはひの者やといたはるにも、お浦は夫にうち向かひしみるゝと異見なすほどに、やゝ目は覚めぬれど後悔そこに立ちがたく、師走晦日に近づきたれど春の用意はさておひて、今年限りに借りし金さへ三方四方の催促を、誠、そら言うち交へ、断りさへもいひ尽くせし手詰めの金の三十両、なすべき術も尽き果てたれば、持ち伝へたる刀を梅之介といへるに頼みたりしに、早速買ひ手あれば刀を渡し受け取りを与へたれば、梅之介は金受け取り帰らんとするを、あるじの酒を強ひつゝ、今月で明く御禁酒なら、閏月を入れる」

⑩【図ウの右中ほどから左下にかけての部分】

「又一つには、いもとの久木年もゆかいであの孝行。こちへ呼んでも承知せず、同じ二人のきやうだいが、わたしは栄耀栄華に暮らし、あの子は難儀のし飽きして、その顔もせずゐるのを思へば、かう座つてゐる錦のしとねも茨の筵の心地ぞや。墨の



図イ

(尾崎コレクション本)



衣の玉だすき、手づから開の水汲みて仏をいつく身とならば、人の思ひもかゝるまじ。二人が御承知あるやうに、そなたきつと願ふてたも。さうない時はこの通り、朝から晩まで泣いてゐる。襟に顔をば次へ」(途中に煙草盆の図あり)

← 「又一つには、いもとのこと思へば、かうして座つてゐる錦のしとねも針の筵。墨の衣の玉だすき、手づから開の水汲みて仏に仕ふる身とならば、少しは罪も消えぬべし。どうぞ御承知あるやうに申してたもと話のうち、文正夫婦入り来たり、様々*」*娘を異見の折から、大ぐじ様よりお使ひと聞いて、衣手出で迎ひ、使ひの趣聞き果てつ。こゝを退き文正が居間へ行かんとなしたるに、文正は見しらぬ人と差し向かひ次へ」

⑫【原本左下部分】

← 「*しづ雄が贈る様々の物好きしたる玉づさを、我が物にして肌へに付け、これを上なき楽しみとせり。しかるにこのこと使ひの者にいひ出だされ、口にはまゆみもいひはれども、安き心地はなさどりける。*」*万事にさとき衣手も胸を痛めてゐる所へ、最前帰りし若松は取つてかへして、文正夫婦を欺きこしらへそのまゝに、この夜はこゝへ留まりけり。これより話次へ」

⑬【原本右上の続きの次】

← 「ことを記すべし。さても」
 「あとへ戻る。。。さても」



図ウ

(尾崎コレクション本)



⑭【原本右下最初の六行】

「続き年も似合いで案内を、されたが縁のはし太の、烏かあ
 くかゝあには、こちが決めたと隔つれば、与兵衛はしをれて
 かしらをかき、二人の女中に婿三人、そこで我らは残りぢや
 に、お福でもよいお亀の代はり、与へ給へとのたま」(「へば」
 と続く)

← 「続き所望くといひければ、代はるく商へる品物の名寄
 せをいとく面白くうち戯るれば、小鳥売りへ年も似合いの縁
 のはし太、おらがかゝあはあの女中トそこでおぬしは残りぢや
 に、お福でもよいお亀ぢよを、ねたり給へと興ずれ」(「へば」
 と続く)

⑮【原本左下の最後の四行】

「恋の情け、今更に振り捨てんは人にして人にあらず。お蓮は
 天下の美人なり。我々が分に過ぎたり。過ちをもて改めず、偽
 りを次へ」

← 「恋の情け、恐れ多くも我々おん仲人仕らんといひければ、年
 通君はさらなり、文正もいたく喜び、お蓮にかくといひ聞か
 せ、衣手・お亀はお寝間のしつらひとくせよと次へ」

⑯【原本右上の書き出し】

← 「一枚隔て前の続き」

「続き」

改変①・②のHは『草紙合』初編の序文と口絵の薄墨を省いたもの
 であり、G関係では、序文のある初編一オ以外、巻数表示のある丁を
 利用した場合はすべてその表示を削っていることになる。もっとも、
 目立つ右の巻数表示は削られていても、⑩を除く四箇所には、本文冒
 頭に「三の巻より」「その直前丁末尾に」「四の巻へ」などといった巻

移りを示す文言が残っているが(⑩には元々その文言がない)、これ
 は巻移り表示が、そのまま本文の続き先をも示している場合があり、
 削ることの判断に手間がかかるので残しているであろう(このこと
 は後述『油屋お染』等にも該当するので、以下この点についてはいち
 ちふれない)。文章や語句を改刻修訂したBとDのうち、③(図ア)・
 ⑤・⑧・⑨(図イ)・⑭の修訂文は、『柴花譚』が利用しなかった各直
 前の丁の本文のポイントを押さえたもの(以下このケースを「直前
 要約修訂」と呼ぶ)で、⑦・⑩(図ウ)・⑫(⑫に直結する⑬を含
 む)・⑯はその逆で、『柴花譚』が利用しなかった各直後の丁の本文要
 点をふまえたもの(以下このケースを「直後要約修訂」と呼ぶ)であ
 る。また⑱は、『草紙合』の本文が、一オ(『草紙合』四編は序文がな
 くいきなり本文が始まる)から、一ウ二オの見開きの口絵をとばして
 二ウへ続くのに対し、『柴花譚』の修訂文は口絵をカットしてす
 ぐ次の丁に直接続くため、それを受ける側も続き方表記を改めざるを
 えなくなったものである(以下この種のケースを「直結修訂」と呼
 ぶ)。③(図ア)は「直前要約修訂」だが、修訂文が絵の一部をまた
 いで続けたため、この「直結修訂」をも行っている。⑤も一文章を二箇
 所に分けた「直前要約修訂」だが、二箇所目は版元が取り扱う葉等の
 広告部分を削り、そのスペースに修訂文の後半を入れている(作品の
 内容予告を含めて、以下これを「広告削除修訂」と呼ぶ)。修訂の結
 果、⑧では「なければ」と続いて文意に矛盾が生じ、「ありければ」
 などと続くべき所)、⑯では、修訂文末と次行頭の表現がうまく続
 かなかつていている(次行頭「へば」の「へ」を削り忘れたのである
 う)。

三、「油屋お染」前編上

『油屋お染』(架蔵)は中本で、四十五丁の前編上と四十四丁の同
 下の二冊からなる。各刷付け錦絵表紙は『草紙合』四編上下のものを

	二十ウ	↓	三十二ウ	
塩屋六編・	三オウ	↓	三十三オウ	⑩ C F (四エ)
	~	↓	~	
	五オウ	↓	三十五オウ	
	六オウ	↓	三十六オウ	⑪ G
	六ウ	↓	三十六ウ	
	七オウ	↓	三十七オウ	
	~	↓	~	
	九オウ	↓	三十九オウ	
	十オウ	↓	四十オウ	
	十ウ	↓	四十ウ	⑫ C E
	十一オウ	↓	四十一オウ	⑬ G
	十一ウ	↓	四十一ウ	
	十二オウ	↓	四十二オウ	
	~	↓	~	
	十五オウ	↓	四十五オウ	
	十六オウ	↓	四十六オウ	⑭ G
	十六ウ	↓	四十六ウ	
	十七オウ	↓	四十七オウ	
	~	↓	~	
	十九オウ	↓	四十九オウ	
	二十オウ	↓	五十オウ	
	二十ウ	↓	五十ウ	⑮ C

要するに『油屋お染』前編上の本文骨格は、『草紙合』四編下から六編下までのうち、六編上の最初の二丁（口絵を兼ねた序文）を冒頭に配し、四編下の最後の二丁半（見開きの末尾絵と本文半丁）と五編上の最初の二丁半（序文と口絵）、それに五編上の最終半丁と同下最初の半丁を取り除いたものであることがわかる。

①から⑮までの修訂箇所のうち、G(③・④・⑥・⑨・⑪・⑬・⑭)とH(①・②)以外の改刻箇所の異同を次に示す。

③【原本内題風表記】

「一番之右 油屋お染 首巻」

← 「一番之右」と「首巻」を削る。

⑤【原本右上の書き出し】

「本文読みはじめ四編の続き霞屋武次郎の娘久木は、難波津に住まひする父に会はんと常陸を立ち出で、武蔵の国帷子の宿にて叔父小仏の綱太らが」

←

「続き待つてくれ。とんだことだ〜と猿ぐつわを解き、つら、せな撫でさすり、へ面目ねへ、おりやッこれが叔父、元の名はうる四郎といふ者、お刈がためにはぢぎの弟。互ひに顔を見ず知らねば、血筋の中と思ひきや」

⑦⑧【原本見開き場面で、⑦左下最後の三行と、⑧下部】

「しれず、さなくともはや夜明け。所の人にめつかつたら、痛くもない腹探られた(丁移り)上にも、どんな災難を*」
 「*受けやう計られず。言ひ訳のたつた上では、やつぱりなが
 の次へ」

←

「しれず。お前は何とも大儀ながら、四五丁あとの辻番へかやう〜知つての通り、詳しく話をしておくれ。わたしは(丁移り)死人の番してゐるト久木をすかし、おつ立てやり*」
 「*心太くも万兵衛(正しくは「万九郎」)がふところの胸巻き手早く奪ひ、なほ両掛の内を取らんとあちこち次へ」

⑩【四エの「寿命の松」の立て札の右と、同左部分および下部】

「。この編*」 「*には、肝心のお染はちよいと出でたれど、一口も▲」 ▲物いはず。久木で若衆は見せたれど、久松は噂もなし。さればこの次六編目は、お染の貞節、久松もいつもと違ひ義を立て、主人と密通せぬ筋を書けども、秋の七草とは似も



図五

(大阪女子大本)



- つかぬ新工夫。もとより拙き作なれど、少しは教えの端ともならんか。引き続けて売り出だせば、皆様もれず御覧の程乞ひ願ひ上げ参らするになん。めでたし〜〜〜」 「笠亭仙果作 (印) 一雄斎国輝画 (花押)」
- ← 文章削除して、作者名・画工名部分「(立て札と提灯の絵)」
- ⑫ 【原本左上最終行と、右下部】
- 「。お由、珍わんを早う帰さんと、せつたの裏にやいとを*」
- 「*すゑる。本もんにそのことなし。絵を以て読みを補ふ」
- ← 「仙果作 国輝画」
- 削除
- ⑬ 【原本左下】
- 「*こともあるべし。そは七編に詳しくいふべし。めでたし〜〜」
- ← 「そは」以下削除

薄墨省略のH①・②は『草紙合』六編の口絵部分である。G関係では、序文が始まる六編一オ以外、改印・巻数表示のある丁を利用した場合は(四編十一オには巻数と改印がある)、それらの表示すべてを削っていることになる。C・Eは単なる削除にすぎないが、③は「一番之左」に相当する文正物語(初編下表紙に「一番左」とある)とのつながりを隠すための措置であり、⑩(図エ)と⑮は広告削除修訂である(⑩で立札と提灯が増補されているのは、広すぎる余白の不自然さを補うためであろう)。入れ木による改刻修訂文関係のD・Fでは、⑤は『草紙合』五編の序文と口絵の計一丁半をとばし、四編十九オと五編二ウを直接結びつけたため、直結修訂が施されており、内容的には直前要約修訂である。見開きの関係にある⑦と⑧は、直後要約修訂であるが、修訂にさいし人名を誤刻している。こうした不用意はEの

⑫にも見うけられ、本文からでは理解できない絵の説明文まで削除している。

四、『油屋お染』前編下

次に同書前編下であるが、これは『草紙合』七編上から九編上までの五十丁を、その板木を利用して四十四丁一冊にまとめ直したものである。書誌的概略については前述したので、左記に対照表を示す(中段が前編下の柱刻・丁付。なお原本柱刻位置は丁付すぐ上)。

草紙合七・一オ	↓	油二編・	一オ	
一ウ	↓	一ウ	① H	
二オウ	↓	二オウ	② H	
三オ	↓	三オ	③ H	
三ウ	↓	三ウ		
四オウ	↓	四オウ		
五オウ	↓	五オウ	④ G	
六オ	↓	六オ		
六ウ	↓	六ウ		
七オウ	↓	七オウ		
七ウ	↓	七ウ		
八オウ	↓	八オウ		
九オウ	↓	九オウ	⑤ F	
十オ	↓	十オ	⑥ G	
十ウ	↓	十ウ		
十一オ	↓	十一オ		
十一ウ	↓	十一ウ		
十二オウ	↓	十二オウ		
十二ウ	↓	十二ウ		
十三オウ	↓	十三オウ		
十三ウ	↓	十三ウ		
十四オウ	↓	十四オウ		
十四ウ	↓	十四ウ		
十五オウ	↓	十五オウ		
十五ウ	↓	十五ウ		
十六オウ	↓	十六オウ		
十六ウ	↓	十六ウ		
十七オウ	↓	十七オウ		
十七ウ	↓	十七ウ		
十八オウ	↓	十八オウ		
十八ウ	↓	十八ウ		
十九オウ	↓	十九オウ		
十九ウ	↓	十九ウ		

古今八・二ウ	↓	二十オ	⑦ D
三オウ	↓	二十ウ	
四オウ	↓	廿一オウ	
五オウ	↓	廿二オウ	
六オウ	↓	廿三〃元オウ	
六ウ	↓	三十オウ	
七オウ	↓	三十ウ	
七ウ	↓	三十一オウ	
八オウ	↓	三十二オウ	
八ウ	↓	三十三オウ	
九オウ	↓	三十四オウ	
九ウ	↓	三十五オウ	
十オウ	↓	三十六オウ	
十ウ	↓	三十七オウ	
十一オウ	↓	三十八オウ	
十一ウ	↓	三十九オウ	
十二オウ	↓	四十オウ	
十二ウ	↓	四十一オウ	
十三オウ	↓	四十二オウ	
十三ウ	↓	四十三オウ	
十四オウ	↓	四十四オウ	
十四ウ	↓	四十五オウ	
十五オウ	↓	四十六オウ	
十五ウ	↓	四十七オウ	
十六オウ	↓	四十八オウ	
十六ウ	↓	四十九オウ	
十七オウ	↓	五十オウ	
十七ウ	↓	五十ウ	
十八オウ	↓	五十オ	
十八ウ	↓	五十ウ	
十九オウ	↓	五十オ	
十九ウ	↓	五十ウ	

(対応する丁なし)
 つまるところ、『油屋お染』前編下の本文構成は、『草紙合』七編上から九編上までのうち、七編下最後の半丁と八編上最初の二丁半(序文と文と口絵)、それに八編下最後の半丁と九編上最初の二丁半(序文と

口絵)をそれぞれ省き、九編上最後の一丁半を新刻の半丁と差し替えたことになる。

①から⑫までの修訂箇所のうち、G(④・⑥・⑨・⑩)とH(①)以外の改刻箇所を次に掲げる。

⑤【図オの左上】

「仙果作 国輝画」

←

「(黒塀の絵)」

⑦【原本右上の書き出し】

「七編の続き読みはじめお六は脇より差し出口」

←

「続き大きな粗忽、そのとが人はわたしでござんす。へイエ

く

⑧【図カの右上と、左下】

「仙果作」「国輝画」

←

「仙果作」部分「(樹木と竹垣の絵)」「国輝画」削除

⑩【図キの左下角と、中央左端人物(全六)を挟む上下の部分】

「次へ」「(手すりの絵)」「(廊下の絵)」

←

「上へ」「下よりすまじと、涙を払ひ両手をつきへ今度はきつと心を入れ替へ、久松のことを思ひ切り、狭四郎様のお帰りの上は、仲良く暮らしませう。ご苦労なされて下さりますな。お由をあちへやつてから、ほかにどうで気に入った近所の女中がござんすから、髪*」「*結はせたりお作りを、初めに引きかへそはくと、二人を引き連れ先に立ち、おのが部屋へと連れ行きけり」



図オ



(大阪女子大本)





図力



(架蔵本)



図キ



(架蔵本)

図ク



(大阪女子大本)

⑫【図ク(対応丁なし)】

「(灯笼の絵)」に、「四天王寺六時堂の前なる池の蓮を詠める 大寺の池の蓮の花咲けば運ぶ心に手向とぞなる 慈鎮和尚 詠」 「一了軒主人写」「笠亭仙果著編」「一雄齋国輝画」

薄墨省略のH①〜③は『草紙合』七編の口絵部分である。G関係で『油屋お染』前編下にも残っている箇所は、『草紙合』七編一オ(序文)の改印と巻数「一」、同十六オの巻数「四」の二箇所であるが、後者は削り忘れであろう(なお『草紙合』九編六オにはもともと巻数表示がないので、前編下にもない)。作者名と画工名が係わるEFでは、⑤(図オ)は両人名を一ブロックにして彫ってあるため、削ると余白が目立ちすぎ、黒罫のごとき図画を入れざるを得なかったであろう。両人名が離れている⑧(図カ)の場合は、作者名を削ると右上本文書き出し「読き」の右側が不自然な余白となるため、図画を入れて本文書き出し「読き」の右側が不自然な余白となるため、図画を入れたと思われる。改刻修訂文関係のB・Dでは、⑦は直結修訂を施した直前要約修訂であるが、修訂文に続く科白の主を削ったため、だれの科白か即座に判断できない。⑩(図キ)も直結修訂が施されているが、

内容的には直後要約修訂である。最終丁裏半丁分の新刻A⑫(図ク)は、本文なしの末尾飾り絵のつもりであるが、そのために本文が同丁オの「猛り狂へど多勢をたのみ次へ」で終わってしまい、その杜撰さを露呈している。

五、「お染恋情」

管見に入った『お染恋情』は、向井信夫氏御所蔵後編下の一本のみである。四十五丁の中本一冊で、刷付け錦絵表紙は『草紙合』初編下のものを流用し(ただし配色を替えている)、「初編下」の三文字を「後編下」と入木訂正している。また「塩屋文正」とあったのを、「お染恋情□」(□の一字分は、刷りこまれた人物の顔に隠れて読めないようになっていて、仮書名とした所以である)と改め、札状の箇所の文様と「古今草紙合 一番左 豊国画」とあったのを削るが、「萬吉板」とあるのは元のままである。見返しには、「たねきよつとる」「くにさだゑがく」「はれ模やう染て衣更着 三べんの下」「紅えいだらはん」とあって、これは柳水亭種清作『晴模様染衣更着』三編下(安政五年刊、紅英堂版)の見返しの流用である。「安政三年丙辰春新刊 笠亭仙果」序(『草紙合』十三編序に同じ)で、最終丁裏には「笠亭仙果著述」「梅蝶楼国貞画」とある。

この『お染恋情』後編下は、『草紙合』十一編下から十三編下までの五十丁を、その板木を利用して四十五丁一冊に仕立て直したものである。前例にならって対照表を次に掲げる(中段が後編下の柱刻・丁付。なお原本柱刻位置は丁付すぐ上)。

さうし合十三・	一オ ↓	油四編・	一オ	①H
〃	一ウ ↓	〃	一ウ	②H
〃	二オ ↓	〃	二オ	③H
草紙合十一・	十五ウ ↓	〃	二ウ	
〃	十六オ ↓	〃	三オ	④G



図ケ



(向井氏本)

絵半丁を補い、最後の半丁も新刻のものと差し替えたことになる。

次に①から⑰までの修訂箇所のうち、G(④・⑥・⑦・⑨・⑩・⑬・⑮・⑯)とH(①③⑥)以外の改刻箇所の異同を示す。

⑤【原本下部最後の十一行】

「十二編はいよゝめでたし。鉢かつぎの後日をも続けて御覧に入れ候。めでたし〜」

削除

⑥【原本下段の一行目の内題】

「古今草昏合十二編」

削除

⑧【図ケの右上と、左中程】

「一雄斎国輝画」「笠亭仙果作」

削除

⑩【図コの上と、左下最後の十行およびその左側】

「笠亭仙果作」「まだこのくだりの話も長く、ここに著す易者のわけも十三編につまびらかなり」「一雄斎国輝画」

⑫【図サ】

「笠亭仙果作」の部分「木の幹の絵」、他の二箇所削除

⑬【見開き図の室内の絵】に、「物の本作者 野崎急作」「換骨 靈法争勝是 多葉古徳高於天 神農百草何有益 諸病平愈一盞煙」

「冬咲の花こそ天下ぶ早梅 内海安重」「相思草壳 土堤於陸」

⑭【室内の絵】に、「この半丁は物の本の作者、野崎急作が住居の体也」「換骨」の七言詩は同じ、「筆先で人の盛衰死生も自由にするは戯作その徳 無名氏」「了軒主人写」



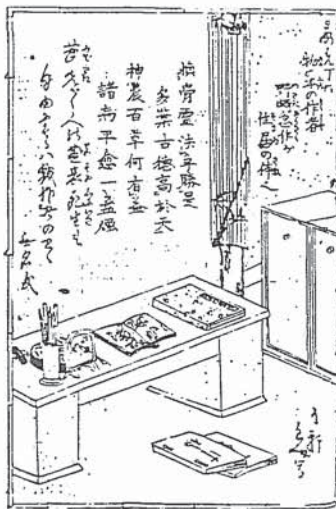
図一



(向井氏本)



図二



(向井氏本)

⑭【図シの左上と、左下最後の十行】

「仙果著述 国貞画図」。「有漏助および網太が結末は、十五編に詳記すべし」



「(樹木の絵)」、「有漏助」以下削除

⑰【図ス】

「(人物等の絵)に、「続き」左右の脇に二人の悪者かい挟んで、つい立つたるは金剛力士のごとくなり」「此旅客とふたひら前の僧とは、度して*」「*名をしるさねど、看官察知し易かるべし。めでたし〜」「板元家製の品御披露 無類襟おしろい。はつちり 一袋四十八銭、同じく流しおしろい さくら香 一包み二十四銭、右はいづれも極々念入れ精製仕り差し上げ候間、御用向きの程奉願上候」「仙果作 国貞画」



「(三方・燭台等の絵)」に、「笠亭仙果著述」「続き」左右の脇に二人悪者かい挟んで、つい立つたるは金剛力士のごとくなり。小夜ぎぬ親子はいふもさらなり、若党・小者・女ばらが喜びさらに響ふるものなし。その時くだんの美少年は、母玉くらに身の上の始め終わりをことつゝまず、ことは短く説き尽くせば、玉くら親子は大ひに驚き、かつ喜びて家へ伴ひ、娘がはからず助けられたる恩を謝し、へそんならあなたは久松様とな。さて〜いかひ御辛勞。しかしその時盗賊にあひ給ひしはもつげの幸ひ、お命冥加のあるといふもの。このお礼には、このことを難波へ申して遣はしませう。あなたもお文をおあげなさい。明あさひ(き)やくを遣はします。ア、そのお染様とやらはもとより、その余のかた〜、さぞかし嬉しくおぼすらんと老いの癖にてくど〜といひつゝ*」「*文を認めさせ、心きゝたる小者を遣はし、この玉づさを届けければ、難波の人々うち集い、読んで驚き見ては喜び、取るものさへも取りあへず、



図シ



(向井氏本)



飛脚とともに玉くらが家に至りて礼を述べ、さて久松がつまがなかりしその喜びは、筆にも▲「▲及ばじ。そのつぐの朝、難波の人々玉くら親子にいとま告げ、久松連れて戻りしほどに、お染は夢かうつともわきがたきまで喜びける。かくて人々談かふして、お染久松に祝言させて、かの山家屋の家を継がせ、名もせい兵衛と呼び換へさせぬ。さてかの盗賊金しや丸、その余の小賊・悪者らは、ことごとくかみの成敗にあひ、善人はますく栄へ、こと落ちもなく治まりて、一時に祝眉を開きしは、めでたかりけることもなり。めでたしくくくくも一つめでたし」。於染久松が再会の喜び、また祝言の体はくだくしきまゝ文を略す。「一了軒主人写」「梅蝶楼国貞画」

薄墨を省いたHの①③と⑥は、『草紙合』十三編の序文と口絵部分、それに十二編の序文部分である（『お染恋情』の本文途中に⑥の序文があることは後述する）。G関係では、序文として使った十三編一才以外、巻数表示のある丁を用いた場合はすべてその表示を削除している。文章や語句を削るにとどまるCでは、⑤・⑩・⑭が広告削除修訂である。同じくCの⑥は、その半丁が上下に二分されており、上段が十二編序文、下段は右端に「古今草紙合十二編 仙果作」とあって本文の「読み初め」と続くが、その内題風の「古今草紙合十二編」が削除されている。この書名が不都合なためであることはいうまでもないが、本文途中の序文が削除されていないのは、半丁全体を使った序文ほどには目立たないからであろう。作者名と画工名が保わるE・Fの、⑧（図ケ）の画工名と⑭（図シ）の両人名は、削った跡の余白の不自然さを取り繕うための措置と思われる、⑩（図ヨ）の作者名は、削除したままでは本文の「続き」とある右側に余白ができて不都合だからであろう。なお十一編下最終丁裏の人名は、もともと大文字の囲み表記ではなく、画中の手拭いの染め文字として絵の中にとけこんでいるので、『お染恋情』でもそのまま利用している。半丁新刻の⑫（図サ）は、十二編下の本文末と十三編上の本文頭との間に半丁分の空白



図八

(向井氏本)

が生じたための措置と思われる、㊦(図ス)は、ひとまず物語を完結させねばならなかったからに他ならない。

ところで、向井氏本の表紙には「後編下」とあった。では「後編上」はどうなったのであろうか。『油屋お染』前編上下と『お染恋情』後編下の各対照表を見直すと、柱刻がそれぞれ「油初」「油二編」「油四編」となっており、また『草紙合』九編上の九ウから十一編下の十五才まで四十六丁分が未利用であることに気づく。未見の『お染恋情』後編上は、おそらく柱刻が「油三編」で、右四十六丁をその板木を利用して四十数丁一冊に仕立て直したものと思われる。『油屋お染』と『お染恋情』は書名こそ異なるが、前・後編に相当するとみてよからう。

六、まとめ

以上、三作四冊の切附本の合巻『草紙合』利用過程をみてきたが、その要点と特色を次にまとめてみる。

この四冊の切附本は、前述AからHの八つの方法を用い、それぞれ『草紙合』五十丁(『栄花譚』は七十丁)を四十四、五丁に仕立て直したもので、各表紙と見返しは、『草紙合』または他作者合巻のそれを流用している。切附本の序文は文面・年次・序者名いずれも旧作のまま、本文関係では、(一)切附本が利用しなかった直前直後部分のものを要約して取りこむ、(二)『草紙合』各編の下の末半丁とその次編上の冒頭半丁はその板木を利用しない傾向がある、(三)必要に応じて本文の続き先を示す表記も改める、(四)大幅な改変はなるべく避けているらしく、やむを得ない場合でも半丁分の新刻にとどまる、といった点を指摘できる。こうして本文をつないでいった結果、文章が続かなくなったり、科白の主が分かりづらくなったり、さらには人名の錯誤や必要な挿絵解説文の削除といった不手際も露呈している。各冊に共通する姿勢としては、二点を指摘できる。一つは、なるべく手間や費用を

かけずに簡便に切附本を造ろうとしていることである。このことは板木流用自体がそれを物語っているし、利用した、序文と口絵の薄墨削除もこれを意味している。また『草紙合』各編冒頭にある序文や、各編上下末にある作者名と画工名の人名表記も、序文の占めるスペースが狭くて目立たないとか、人名表記が絵の一部となつてとけこんでいる場合、切附本はこれらを首尾以外の箇所でも平然と使用している(もっとも、各一箇所ずつだが)。いま一つの共通姿勢は、『草紙合』が「続き物」の「合巻」であることの痕跡を、できる限り隠そうとしている点である。これは最も注目すべき点で、(一)表紙と見返しに『草紙合』を利用した場合は、旧書名を見づらくするか新書名と差し替え(これは当然だが)、編数は入れ木で前・後編と改めるか削除する、(二)改印と巻数表示は、切附本が序文として利用した丁以外ごとく削除する(ただし一箇所のみ巻数表示の削り忘れがある)、(三)『草紙合』各編上下末丁の裏を利用した場合は、大文字の作者名と画工名をすべて、削除するか図画と差し替える、(四)『草紙合』における後続編の内容予告は、これまたすべて削除する。以上四点を施された、刷付け錦絵表紙を持つ四十四、五丁の中本一冊本は、もはや合巻とは呼びがたく、まさに草双紙型の切附本である。なお、「読切り合巻」という言葉があるが、これは合巻の諸要素を備えた純然たる合巻であり、初編・二編・三編と次々に売り出される続き物合巻に対し、例えば上・中・下各二十丁で完結・読切りとなる合巻をいうのであり、草双紙型切附本とは異なる。

右の切附本三作四冊は、それではいづどこから刊行されたのであるか。前述のように四冊には、それぞれ嘉永二年、同四年、同五年、安政三年の笠亭仙果自序があるが、これは既に述べたように『草紙合』の年次そのまま、参考にならない。

まず『栄花譚』であるが、『草紙合』四編上までを利用しているから、その刊行嘉永三年以後で、嘉永六年刊『大晦日曙草紙』二十編の見返しを流用しているから、さらにこの年以降である。また奥付広告

をみるに、二種類の葉の広告の他に、三亭春馬作・国貞画の合巻『仇ざくら恋白濤』初・二・三編と、柳亭種清作・国貞画の読切り合巻『三世相縁の緒車』全三編を掲げる。三馬作の初・二編と三編は、それぞれ安政四年と同五年に、また種清作の全三編は一括して安政四年に、ともに紅英堂萬屋吉蔵から刊行されている。『栄花譚』はひとまず安政五年頃の出版で、見返しにも記されていた紅英堂板とみてよさそうである。

『油屋お染』前編上は『草紙合』六編下までを利用しているから、その刊年嘉永四年以後である。架蔵本は、奥付広告に「未春新版標目」として、柳下亭種員作・国貞画の合巻『童謡妙々車』八・九編その他を掲げる。『童謡妙々車』の八・九編からして「未」は安政六年で、版元は紅英堂と特定できる。また大阪女子大学附属図書館蔵本の奥付広告は、「萬屋吉蔵梓」として、地図類の他に「三河翁翁作 相撲起頭 大本一冊 初編より十編迄出来」「倉鼠陳人編 甲越古状揃 大本一冊 頭書講訳附」と広告する。『相撲起頭』十編は安政元年刊で、倉鼠陳人（笠亭仙果の別号）の『甲越古状揃』は嘉永四年・安政二年・同六年の三種の刊本がある。これらからすると、前編上の出版は安政一・二年頃と同六年頃の可能性があるが、『栄花譚』より先の刊行とは考えにくく、結局は架蔵本広告の結論と同じ安政六年頃ということになる。

『油屋お染』前編下は『草紙合』九編上までを利用しているから、その刊年嘉永六年以後である。奥付広告は大阪女子大学附属図書館蔵本にはなく、架蔵本には、「安政六年」未歳陽春開板標目」「萬屋吉蔵梓」として、仙果の『八犬伝犬の草紙』四十、四十一編（実際の刊行は安政六年と翌万延元年）等十部の合巻類を掲載する。前編下の出版も安政六年頃と思われる。

『お染恋情』後編下は安政三年刊の『草紙合』十三編までを利用しているから、この年以後の出版である。奥付広告は『油屋お染』前編下架蔵本と同一、したがって結論は前述に同じということになる。後

補の可能性なきにしろあらずの奥付広告に頼りながらではあるが、以上のことから、三作四冊の切附本は、おそらく未見の一冊も含めて、『草紙合』の板元紅英堂が安政六年前後の頃に次々と出版したと推定する。紅英堂は同じ頃に他にも同様の切附本を出していることからそう思われる（後出拙稿参照）。

本稿で述べた改変に、板元の紅英堂が深く関与していることはいうまでもないが、それは後述するとして、『油屋お染』前編下と『お染恋情』後編下の各末尾（図ク・図ス）にみえる「了軒主人」と、『お染恋情』後編下の本文途中の半丁絵（図サ）に出る「了軒主人」も関係者の一人（おそらく同一人物であろう）とみてよい。ともに『草紙合』にその名がないからである。これが何人であるかは残念ながら不明であるが、多少なりとも絵心があった本文補筆や賛も同人の手になるとすれば、仙果自身の別号であるかもしれない。

ところで、それでは紅英堂萬屋吉蔵はなぜこのような改変を行ったのであろうか。私見の一部は既に拙稿『幕末統き物合巻と切附本』『松浦船水棹婦言』の場合（『大妻国文』第二十四号、平成五年三月）でも述べたが、要するに紅英堂の商業政策の一つである。安政期の合巻界は、読本抄録物を中心とする統き物長編合巻の隆盛期で、どの版元も年ごとに増えていく板木の山を抱えていたはずである。統き物合巻は定期的（毎年正月が基本である）に統編を出さなければ、読者に忘れ去られてしまう恐れがあるため、版元としては、決して珍しくはなかった、予定通りに出せない遅延を当然憂慮したのであろう。一方切附本は、嘉永・安政期を中心に明治に至るまで行われた、基本的には読切り型のジャンルである。安政期はつまり、統き物長編合巻と切附本の両隆盛がまさに重なり合う時期であった。作者側の仙果が、統き物合巻を書く一方で「いつまでも結果ぬ合巻より、書切の切附表紙流（万延新刻『親鸞聖人御一代記』）」といっているのは、順調に統編を出し続けようとする版元側と、時として筆が追いつかない作者側、それに読者側動向の三者をふまえた言である。これを、作品の評

判と作者の筆の遅れを腕み併せつつ、版元側の商業政策として取りこんだのが紅英堂である。『草紙合』全十三編を手間や費用をかけずに簡便に、そして読者都合ではない切附本に改変した背景とその意味はここにあったのである。

紅英堂は、本稿で扱った三作四冊の切附本や、右拙稿で述べた安政六年頃の切附本『松浦船水棹婦言』の他にも、いくつかの作品を類似のいささかあくどいやり方で改変しているが、紅英堂が明治にまで生き残り地本問屋として力を維持し得たのも、こうした商法によるところがあったかもしれない。

〔付記〕

資料の利用をお許し下さった名古屋蓬左文庫、大阪女子大学附属図書館、故向井信夫氏に感謝申し上げます、お世話下さった上野洋三氏にお礼申し上げます。なお、私の怠惰のために本稿が昨年度の本誌に間に合わず、昨年十一月に故人となられた向井信夫氏にご報告できなくなりました。泉下の向井氏に心よりお詫び申し上げます。